

博物館だより

NO.20

特別展 「川合玉堂—郷土が誇る近代日本画の巨匠—」

平成7年10月21日（土）～11月19日（日）



《五月雨》昭和24年頃 一宮市博物館蔵

川合玉堂（かわいぎょくどう1873 - 1957）は、一宮市の隣の愛知県木曾川町に生れ、少年時代を岐阜市で過ごしたのち、京都のまるやましゅうは円山四条派、ついで東京に転じて狩野派の画風を極め、古典技法を融和した独自の境地を開きました。一方、東京美術学校教授、官展審査員などを歴任、昭和15年に文化勲章を受章するなど、たえず近代日本画壇の第一人者として活躍をしてきました。

本展では、その初期から晩年に至る代表作の中から、初公開作品を含む30余点をご紹介します。詩情豊かに描き出された日本の自然と心、そして日本画の伝統技法の持つ微妙な味わいをご鑑賞ください。

ここに掲げた「五月雨」は、畢生の名作「さいう彩雨」を彷彿とさせる構図で、梅雨時の山村風景を、ほとんど水墨画といえる淡い彩色で描いています。そこからは、雨音に交じって、水車の音、そして二人の農婦の話し声まで聞こえてくるようです。

【川合玉堂の芸術】

たけうちせいほう よこやまたいかん
竹内栖鳳・横山大観と並び近代日本画の三大巨匠と称されてきた川合玉堂は、昭和32年（1957）6月30日、享年84歳でこの世を去った。玉堂が亡くなったとき、日本画家かぶらぎきよかた「日本の山河がなくなったような気がする」と語っている。玉堂芸術の本領は風景画にあり、身近な日本の自然とそこに生活する人々を共感を持って描いたところに特徴がある。明治・大正・昭和にわたってながく人々に親しまれきたその作品は、一見古風な印象を与えるが、今日もなお我々の心に訴えかけてくるものがあるように思われる。

明治以来の近代化の波は、絵画の世界においても大きな流れをつくり、古風なしきたりを脱却した新たな画風を探ってきた。今日、日本画と洋画の区別はほとんど意味のないものになっている。その中で玉堂は、西洋絵画の影響を受けながらも、基本的には日本画・東洋画の伝統である墨の表現にこだわり続けた。華々しい経歴から見落とされがちであるが、作品をみると、たとえそれが彩色であっても、基本は水墨画であり、筆の技の妙である。

玉堂の生涯は大きく三つに分けられる。14歳で日本画家もちづきぎよくせん とうのぼいれい 望月玉泉ついで幸野煤嶺に師事し、天分を大きくのばした京都時代は、毎日熱心に写生や模写を行い、画家としての基礎を築いた時期といえる。特に写生の習慣は終生途絶えることはなかった。明治28年（1895）第四回内国勲業博覧会に発表した《鵜飼》は、京都時代の集大成ともいえる作品である。この頃すでに玉堂は京都画壇の地位を揺るぎないものにしていたが、それとともに制作上の疑問、苦悶もまた深くなっていた。そ



《朝もや》昭和13年 東京国立近代美術館蔵



《深林宿雪》昭和11年 岐阜県美術館蔵

して、この会場で東京画壇の橋本雅邦の作品に出会い、その斬新な色彩と力強い表現に強烈な感銘を受けた玉堂は、翌年、意を決して京都を引き払い雅邦に入門を果たした。

東京時代は、雅邦のもとで狩野派の習得に励み、大正期には琳派に挑戦、そして中国の宋画にも深く傾倒し、それら古典絵画の伝統を吸収しながら独自の境地を開いていった。昭和初期には、《峰の夕》《深林宿雪》《朝もや》《彩雨》に代表される近代風景画を確立する。この頃が日本画壇における最も充実した時期であった。《彩雨》を発表した昭和15年に文化勲章を受章、翌年には朝日賞を受賞している。

やがて、日本は太平洋戦争に突入、奥多摩の疎開先で、牛込区若宮町（現新宿区）の自宅が東京大空襲によって焼失した報を聞いた玉堂の悲しみは深く、焼け跡を見ることもなかったという。以来、山間の画房に隠棲し、若い頃から写生に親しんできた自然の中に身を委ねる。戦争により都心から離れることになったが、期せずして最も愛した自然の中に住まうことになったのである。戦後の十二年間は、なにもものにも囚われず、絵と文学に没頭した。日々、写生のために野山を歩き、そこで交わされる村人との会話は、この上ない喜びでもあったろう、野菜を貰ってはお礼に絵を描いてあげたという話も伝えられる。

玉堂の描いた暖かみの溢れる世界は、何時の世も変わらぬ、自然と人の暮らしの、日々の繰り返しもあった。それは、どこかで見たことのある風景であり、郷愁をさそわれるものである。かつて身近にあった自然が失われてゆく姿に直面している現在、玉堂の作品は、私たちへの静かな問いかけのように思えてくる。（毛受英彦）

民俗探訪 (6)

一宮市内の火葬施設

現在ではほとんど見るができなくなった習俗に「ソウレン」がある。それは、葬式の後、棺を墓まで運ぶ道行きである。一宮市では、昭和38年、奥町六丁山に火葬炉8基を備えた市営の火葬場が整って以来、ソウレンも見られなくなっていった。それと同時に、集落ごとにあった墓地内の火葬場も使われなくなり、急速にその姿を消していったのである。

愛知県一宮保健所の調査によれば、昭和44年前後には、奥町六丁山・常光町にあった2つの市営火葬場を除き、市域には83の火葬場跡が残存していた。それらは集落ごとの墓地内につくられていたため、その後20余年の間に、それぞれの集落が行った墓地の整備によって壊され、現在は墓地になってしまったところが多い。最近では、萩原町

西御堂の火屋が墓地改修により、なくなってしまった。

そこで、今回、西御堂の火屋・火葬施設を記録する機会を得ることができ、これを機に市内にどれくらいの施設が残っているのか確認をしてみることにした。前出の保健所の台帳では46の集落で残っているようになっており、意気揚々とまわり始めた。ところが、最初に確認を始めた千秋町で全滅、前途は暗くなってきた。確認作業が終わり、火葬施設が残っているのはわずか11カ所であることがわかった。火屋が5カ所、地面を掘りこんだ炉が3カ所、レンガの炉が8カ所である。その分布を示したのが図1であるが、火屋の残存が南西部にかたよっていることがわかる。

つい最近壊された西御堂の火屋は、他の3例と同様2間×2間の大きさの木造建てで、北向きに遺体の頭を据え、参列者が出入りできるよう北側に1間の出入口が設けられている。南側にはオンボさんの出入口が半間で作られている。炉の北端には、現在では市内で作られなくなった和ロウソクの一部分が

表1 市内に残る火葬施設一覧 (A: 炉体が土埴、B: 炉体がレンガ)

NO	旧村名	連区	住 所	建物	規模	炉	備 考
1	高田	葉栗	大字高田字長田 147 番地	×	—	B	1.5 m弱四方のレンガ炉が残存。棺の搬入口は北側。
2	黒岩	浅井	浅井町黒岩字宮東 319	×	—	B	レンガに一部タイル張り。棺の搬入口は西側。昭和初期に設置。
3	一色	—	南出町 345 番地の 1	○	2×2 間	A	地面を掘り込んだ炉。底面に、棺を置くさなあり。参り口は北側。
4	時之島	西成	大字時之島字二本松 1-1	×	—	B	1.5 m弱四方のレンガ炉。下部が埋もれている。
5	妙興寺	大和	大和町妙興寺 2474 ほか	×	—	B	棺を据える部分を壊し、下部の焚き口をゴミ焼却炉として利用。
6	氏永	大和	大和町氏永 256	×	—	B	棺を据える部分を壊し、下部の焚き口をゴミ焼却炉として利用。
7	戸塚	大和	大和町戸塚字宮崎東 1084	○	2×2 間	A	地面を掘り込んだ炉。参り口は北側。火屋倒壊寸前。
8	重吉	丹陽	丹陽町重吉字鬼ヶ島 2-1	×	—	B	1.5 m弱四方のレンガ炉。棺搬入口は北側。ゴミ焼却炉として利用。
9	二子	萩原	萩原町萩原字三味南	○	2×2 間	B	火屋内部にレンガ炉あり。保存状態良好。棺搬入口は北側。
10	高木	萩原	萩原町高木字神崎 322	○	2×2 間	B	火屋内部にレンガ炉あり。保存状態良好。棺搬入口は西側。
11	中島	萩原	萩原町中島字跡の口 1325	○	2×2 間	A	火屋内部の炉体は、土で埋められており不明。参り口は西側。

残っていた。炉全体は、長さ2 m 20cm、幅1 m 32cmの卵形で、内部側面をレンガで補強したものである。深さは40cm弱である。もともとは素掘であったのであろう。昭和初期まで使われていた。

市内で最も古い形で火屋と炉が残っているのは大和町戸塚である。今回は詳しい聞き取り調査を行っていないが、昭和20年に使った後、2回ほど使用したとのことである。現在は、炉内に火屋の屋根・壁が崩壊し、炉底の様子が不明であるが、地面を掘っただけのものだったそうである。

今回は、確認作業にとどまってしまうが、今後聞き取りを行い、記録していきたいと考えている。

また、吉岡郁夫先生をはじめ下記の方々にご教示・ご協力を賜った。ここに記して深謝の意を表する次第である。

水野正秋 渡邊良吉

愛知県一宮保健所（敬称略）

（久保禎子）

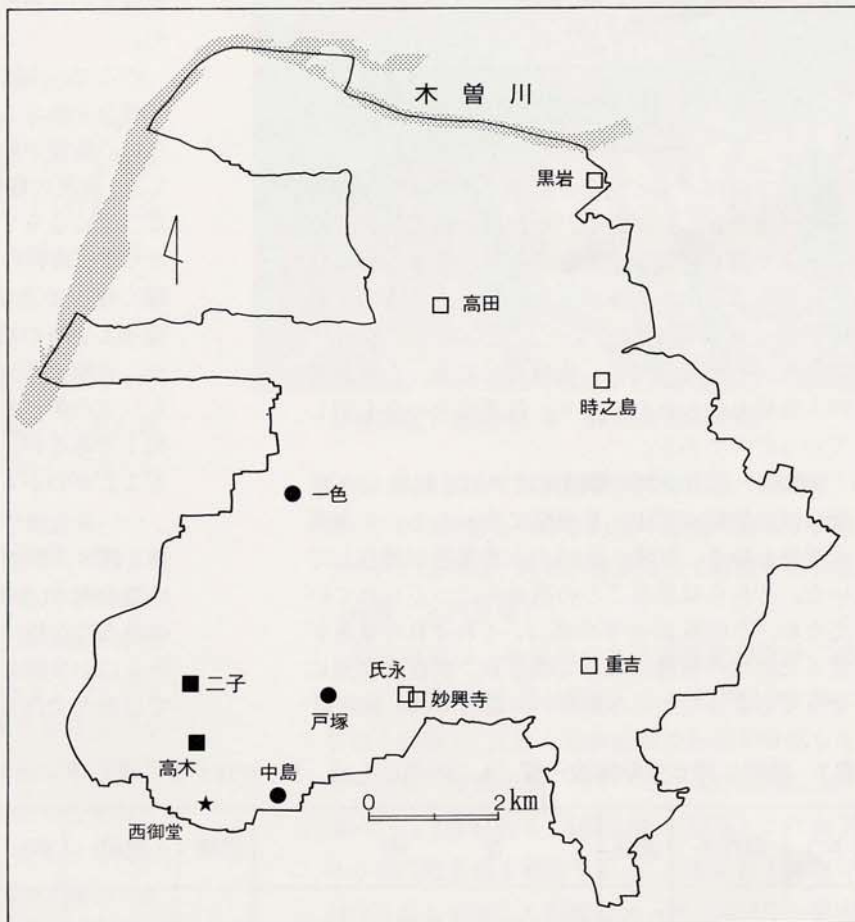


図1 市内に残る火葬施設の位置

(□レンガ炉、●火屋+地面を掘りこんだ炉、■火屋+レンガ炉)

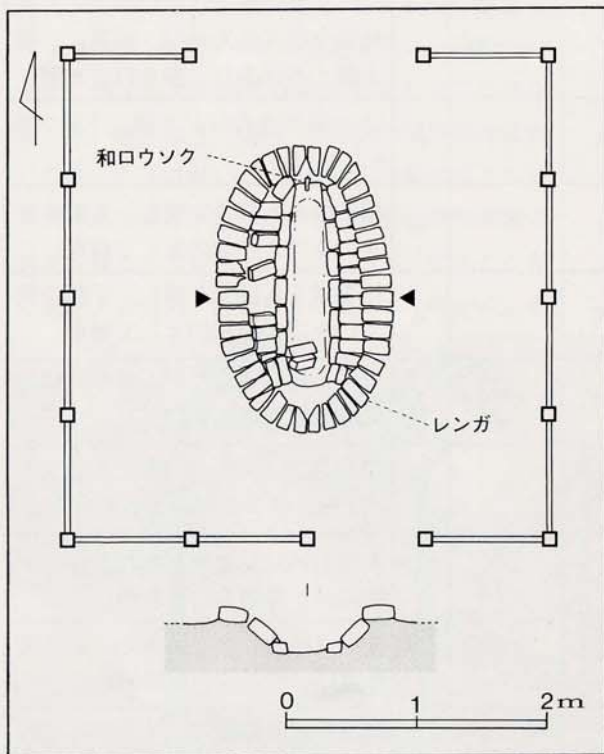


図2 西御堂の火葬施設（土本・久保図面）



写真1 西御堂の火屋（土本典生撮影）



写真2 西御堂の火葬施設（土本典生撮影）

企画展「田所遺跡と光明寺 ー大溝と墳墓堂ー」

終わる！！

7月21日(金)から8月31日(木)まで開催した企画展が終了した。この企画展は、1992年から、愛知県埋蔵文化財センターによって実施されている、東海北陸自動車道関連の発掘調査で出土した遺物の中から、田所遺跡、北道手遺跡の出土品を中心に展覧し、中世における田所周辺の様相(大溝、墳墓堂)に迫るとともに、古墳時代から古代、中世をへて近世にいたる田所遺跡周辺の歴史を概観したものである。

特に大溝の存在について、大正六年に発行された『葉栗村誌稿』では、「屋敷の廣さは外構東西四町南北五町あり内構は一町平方あり其の周圍に大堀及大土堤を築けり現今田所というは此の屋敷のことなり。」と記載している。また、徳川林政史研究所所蔵の『田所村天保村絵図』にも、「井堀」「戌亥出」



「辰己出」等の小字が記載されている。

大溝の存在が田所村に伝承されてきたこと、そして、発掘調査の事実が、その伝承と一致するということは、驚くべき事実である。

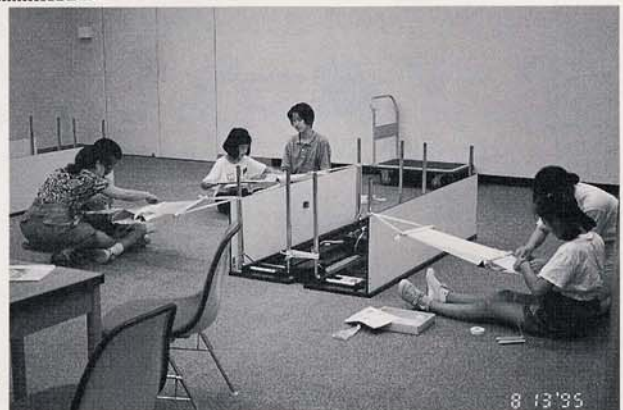
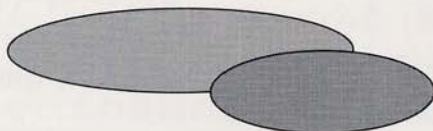
開催期間中の入館者数は、3200名を越え、2回開催した講演会は、ともに受講者が百名を越える盛況で、関心の高さを示す数字といえよう。7月30日(日)には愛知県埋蔵文化財センター調査課課長補佐の高橋信明氏、8月20日(日)には同センター調査研究員の増沢徹氏を講師に招き、それぞれ「田所以前」、「田所以後」のテーマで講演していただいた。

墳墓堂と大溝という「田所」の時代の遺構は私たちに何を語りかけているのだろうか。



博物館講座「弥生機で織ってみよう」

「編布をつくろう」と隔年で行なってきた博物館講座「弥生機で織ってみよう」を、今年も8月13日に開催しました。今年は残念ながら参加者が少なく、寂しい講座となりました。ただ、一人一人非常に丁寧に織ることができ、夏休みの宿題としても合格だったようです。

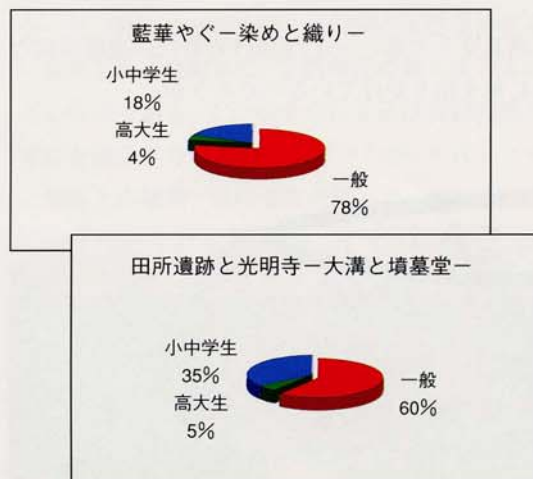


【博物館日誌（抄）

（7.1.5～8.31）

- 7.1.10～2.26 収藏品展「くらしの道具—今と昔—」
 7.3.12～4. 第6回「手つむぎ・染め・織り展」
 7.3.4・5 博物館講座「土器づくり」
 7.3.11・12 博物館映画劇場
 ・「文楽に生きる『吉田玉男』」
 ・「ピコリーノの冒険」
 7.3.26 島文楽公演
 7.4.28～5.28 企画展「藍華やぐ—染めと織り—」
 7.5.7 講演会「日本のもめんの輝き」
 講師（財）日本綿業振興会常務理事
 日比 暉 氏
 7.5.14 体験会「筒描・型染入門」
 講師 染色工芸家 山田 幸代 氏
 7.5.21 講演会「綿から糸への道具使い」
 講師 古式綿打ち保存会長
 丹羽 正行 氏
 7.7.21～8.31 企画展「田所遺跡と光明寺
 —大溝と墳墓堂—」
 7.7.30 講演会「『田所』以前」
 講師 愛知県埋蔵文化財センター
 調査課課長補佐
 高橋 信明 氏
 7.8.13 博物館講座「弥生機で織ってみよう」
 7.8.20 講演会「『田所』以後」
 講師 愛知県埋蔵文化財センター
 調査研究員 増沢 徹 氏

【展覧会開催中の入館者数】



1. 企画展「藍華やぐ—染めと織り—」
 4/28～5/28 入館者数 2412人/26日
2. 企画展「田所遺跡と光明寺
 —大溝と墳墓堂—」
 7/21～8/31 入館者数 3259人/36日

【ご来館有難うございました

（7.1.5～8.31）

フォーラム21 少年少女合唱団 稲沢市立稲沢東小学校3年生 長田歴史会 亀遊会 東海学園女子短期大学国文学科日本文化コース 西春日井郡新川町立新川小学校3年 松静会 中島郡祖父江町立祖父江小学校3年 遊魚会 松岡町教育委員会 富士川町歴史会 尾張水道事務所 冬雷短歌会 尾張部都市国保事務担当者会議 朝謡会 けむしの会 尾張部都市教育長会議 江蘇省人民対外友好協会 一宮市人権擁護委員協議会 愛知県公民館連合会西尾張支部 富士小学校 松井町町内会 末広小学校 走る県政教室 名古屋市港区郷土史跡研究会 尾張西部史跡・施設めぐり 愛知県尾張事務所 愛知県小中学校長会文教委員会 適応学級サンシャイン138 FEC シンガポール研修団 親子施設めぐり 東浅井町内会 都市職員厚生連絡協議会中部地区協議会 一宮市社会福祉協議会浅井支会 一宮市立小中学校新規採用教員等 県史跡整備市町村協議会 全日本軍装研究会

【次回の展示会】

企画展「くらしの道具—今と昔—」

1/9～2/25

今年で5回目になるこの展示は、歴史を初めて習い始める小学校3年生のための展示です。市内の小学校3年生は、全員来館してくれます。初代3年生はすでに中学生になり、今年の夏休みは宿題を解決するため再びやってきました。

作品展「手つむぎ・染め・織り展」

3/10～3/31

今年で7回目を迎えるこの展示では、繊維講座の受講生と尾張もめん伝承会の会員の方々の作品を展示します。

一宮市博物館だより 第20号

平成7年10月21日

編集・発行 一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地

TEL 0586-46-3215

FAX 0586-46-3216